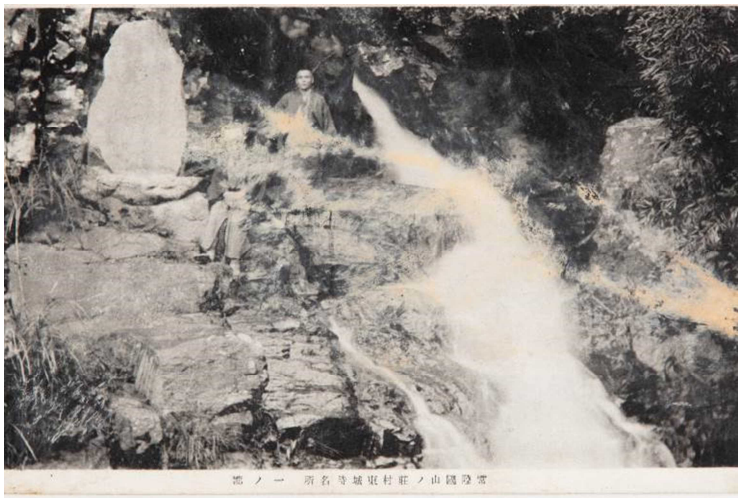
霞

―2021年度春季展示室だより―

土浦市立博物館
令和3年5月11日発行(通巻第53号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々のくらし」を総合テーマに、春（５～６月）・夏（７～９月）・秋（10～12月）・冬（１～３月）と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞（かすみ）」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(53)
絵葉書「常陸国山ノ荘村東城寺名所一ノ滝」



昭和８年（1933）年以降に発行された名所絵葉書の一葉。「一ノ滝」は、市内東城寺地区の山を水源とする天の川上流の滝のひとつでした。勢いよく落水する滝のかたわらには、２人の男性の姿と石碑が立っている様子も見えます。地形の改変により、写真のような風景はみられなくなりましたが、「駒ケ滝」（流鏑馬祭の大猿退治の物語で身を清める滝）は、現在も確認できます。【情報ライブラリー検索キーワード「風景」「山ノ荘」】

目　次

○古写真･絵葉書にみる土浦(53)・・・・・・・１
○博物館からのお知らせ・・・・・・・・・・１
○風土記が伝える古代東海道（古代）・・・２
○水戸徳川家からやってきた刀（近世）・・３
○弟へのまなざし（近世）・・・・・・・・・４
○考古学に親しむ（近代）・・・・・・・・・５
○市史編さんだより・・・・・・・・・・・・６
○土浦藩土屋家の横顔・・・・・・・・・・・７
○霞短信「『土浦』の魅力を紹介する」・・８
○コラム(53)・・・・・・・・・・・・・・・８
○情報ライブラリー更新状況・・・・・・・８

博物館からのお知らせ

★★土浦ミュージアムセミナー★★

①６月２０日（日）午前１０時～１２時

○下坂田貝塚の踏査・分布調査の成果
○土浦周辺の中世石造資料にみる地域的特徴について
○土浦の考古学のさきがけ　島田増次郎

②６月２７日（日）午前１０時～１１時３０分

○常陸と下総を結ぶ古代の道―直線県境から探る東西道
○晦日庚申と塚つき

土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話します。

と　こ　ろ／上高津貝塚ふるさと歴史の広場
定　　員　／毎回40名（事前申込み制、先着順）
申込方法／５月25日（火）午前９時から電話または直接
参　加　費／毎回100円（資料代）
問い合わせ／上高津貝塚ふるさと歴史の広場（０２９－８２６－７１１１）

★★夏休みファミリーミュージアム収蔵品展
「先人たちのうでくらべ」Ｐａｒｔ２★★　７月２１日（水）～８月２９日（日）

剣術・砲術・弓術の修練に励んだ土浦藩士の活躍をご紹介します。

博物館マスコット
亀城かめくん

★無料開館のお知らせ　５月１６日(日)、１８日（火）※国際博物館の日

※お知らせ欄の行事・日程は、一部変更となる場合があります。

２０２１年度　春季の展示資料解説①　古代

風土記が伝える古代東海道

『常陸国風土記』は、今から 1300 年ほど前の奈良時代に作られたものです。地名の由来や産物、伝承などが書かれており、古代の常陸国の様相を今に伝えるかけがえのない資料です。豊かな内容をもつ『常陸国風土記』のなかから、土浦地域にも関わりのある古代の道路に関する記載をご紹介します。

古代の日本では、中央集権体制を確立するため、都を中心に放射状に延びる主要幹線道路の整備が行われました。これを駅路といい、約 16ｋｍごとに駅家が設けられました。駅路は、目的地を最短距離で結ぶため、可能な限り直線的に作り、幅は 12mにも及ぶことが発掘調査からわかっています。都から東国に向かう駅路は、東海道と東山道の２つのルートがありますが、常陸国は太平洋沿いを通る東海道の終点になります。

東海道駅路は、下総国を経て常陸国に入る際、最初に信太郡を通ります。信太郡は、現在の稲敷市から阿見町、牛久市の一部、そして土浦市の南部を含む地域です。『常陸国風土記』では次のように記述されています。

> 榎浦津あり。便ち、駅家を置けり。東海大道にして、常陸路の頭なり。所以に、伝駅使等、初めて国に臨まむとするに、先づ口と手とを洗ひ、東に面きて香島の大神を拝みて、然して後に入ることを得。

駅路が「東海大道」と呼ばれていること、常陸国の玄関口が榎浦津であり、そこに駅家があったこと、使者は東方を向いて「香島の大神」すなわち鹿島神宮を遙拝し、常陸国に入ったことなどが書かれています。榎浦津の場所は諸説ありますが、稲敷市柴崎付近が有力な候補地のひとつです。

榎浦津からは、霞ケ浦西岸の信太郡を南北に抜け、土浦市域に入り、常陸国府（石岡市）に向けて駅路が続きます。1300 年以上前の道ですが、現在も道路として使用されていたり、土地の地割・境界として痕跡を確認できるところが市内各所にあります。

阿見町方面からつづく駅路は、花室川を渡り、土浦市域に入ります。大岩田から霞ケ岡町、小松ケ丘町と北西方向に延びる直線状の道路や地割が確認できます。その先の小松貝塚の発掘調査では、実際に道路の痕跡が確認されています。さらに下高津を通り、向きを変え桜川を渡ります。渡河地点ははっきりしませんが、田中八幡神社の前からまた直線状の道や地割が神立付近まで確認できます。右下の写真は殿里・西真鍋町付近で、小字は「長道路」です。私たちの暮らすこの町に、奈良の都まで続く幅の広いまっすぐな道が 1300 年前に通っていたことは、私たちの想像力を刺激してくれます。　（堀部 猛）

『常陸国風土記』（信太郡）　当館所蔵

土浦市殿里・西真鍋町付近（南より）

春季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも古代コーナーに展示しております。
●寺畑遺跡出土　墨書土器「千寺」（当館所蔵）
●石橋北遺跡出土　鉄鉢形土器（個人所蔵）

２０２１年度　春季の展示資料解説②　近世

水戸徳川家からやってきた刀

―「御拵無之御腰物」―

令和３(2021)年の大河ドラマ「青天を衝け」では、水戸徳川家の人々も多く登場しています。この水戸徳川家から土屋家にやってきた刀が13振存在することは、あまり知られていません。今回は現存する１振をご紹介します。

土屋家に贈られた刀を知ることができる記録に、土屋家で刀剣を管理するために使っていた台帳「御拵無之御腰物」（図１）があります。ここには全部で109振の刀剣の寸法や銘の有無、贈り主などが記されています。このうち、水戸徳川家からやってきた刀13振を表にまとめました。ここには贈られた刀もありますが、13振のうち７振は文化８（1811）年に「御持参」したものです。

７振の刀を持参したのは誰でしょうか。文化８年には、水戸徳川家から土屋家に養子入りをする人物がいます。幼名を治三郎といい、徳川治保の三男です。後に名を彦直と改め、土屋家９代当主となりました。土屋家８代当主寛直が16歳の若さで亡くなったことで、土屋家には後継者がいなくなります。そこで水戸徳川家から養子を迎えることとなりました（詳細は７頁「土浦藩土屋家の横顔」を参照）。一度は領地返還の恐れもあった土浦藩土屋家は、彦直の養子入りにより存続しました。

養子入りの際に持参した７振のうちの１振が「備前重真御刀」（図２）です。拵を構成する三所物（小柄・笄・目貫）に徳川家の家紋である三つ葉葵がほどこされていることも、その来歴を裏付けています。

水戸家からやってきた刀の多くが、江戸時代の後期から幕末に集中しています。また、彦直の甥で、10代当主寅直の従兄弟にあたる、徳川斉昭からも刀を贈られています。土屋家にとって13振の刀は、水戸徳川家との縁戚関係が深化していったことを物語る資料でもあるのです。

（西口正隆）

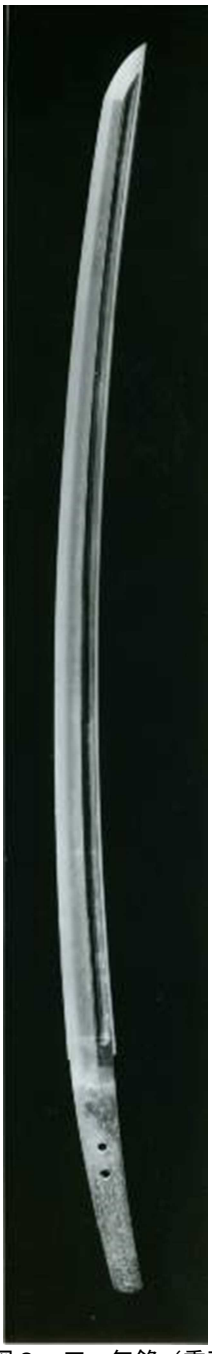


図２　刀　無銘（重真）
当館所蔵

	銘	伝来	贈り・持参主
1	青江恒次御刀	中納言様御隠居之節上使御祝儀水戸少将様より	中納言:徳川光圀 水戸少将:徳川綱條
2	備前重真御刀	文化八未年御持参	土屋彦直
3	備前盛光御刀	文化八未年御持参	土屋彦直
4	備前忠光御刀	文化八未年御持参	土屋彦直
5	貞行御刀	水戸宰相様御遺物	徳川治紀
6	若州冬廣御刀	水戸右中納言様御遺物	徳川斉脩
7	水府住直江助政御刀	天保五午年五月　小石川様より	徳川斉昭
8	備前忠光御小サ刀	文化八未年御持参	土屋彦直
9	備前久光御脇指	文化八未年御持参	土屋彦直
10	永則御脇指	文化八未年御持参	土屋彦直
11	正勝御脇指	文化八未年御持参	土屋彦直
12	水府住市毛徳鄰御脇指	天保五午年五月　小石川様より	徳川斉昭
13	無銘御脇差　源烈公作	文久元酉年　水戸様より御到来	徳川慶篤

文政9年11月「御拵無之御腰物」を基に作成しました。銘・伝来は史料上の表記です。

表　水戸徳川家からやってきた刀

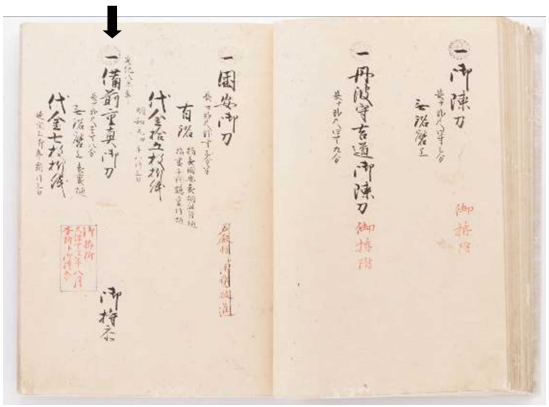


図１「御拵無之御腰物」（重真掲載箇所）　当館所蔵

春季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しております。
●刀　無銘（重真）　南北朝時代（当館所蔵）
●「彦直公御入部御行列」文化11年8月　（個人所蔵）

２０２１年度　春季の展示資料解説③　近世

弟へのまなざし

―色川三中「古叙廼布留道」―

「きちんと記録しておけば迷わず、争うこともない」。この言葉を遺したのは、土浦生まれの国学者色川三中（1801～55）です。「忘れたり、あやふやにならないためには、確かな記録が大切だ」という教えは、現代の我々にも通じます。50 歳のとき、江戸の絵師群山（生没年不詳）が三中の家に滞在して肖像を描きました。表情からは優しさや穏やかさよりも、冷静で厳格な性格がかいま見えます。

令和２(2020)年 12 月 28 日、色川三中関係資料は、新発見の 10 件（22 点）が茨城県指定文化財に加わり、合計 555 点が県民の宝となりました。三中は国学、薬種商、醤油醸造業などで業績を残した人物ですが、冒頭の言葉は、家業の薬種商を受け継がせることにした弟に渡した教訓書の一部です。５人兄弟の長男としての、弟おもいの一面をご紹介しましょう。

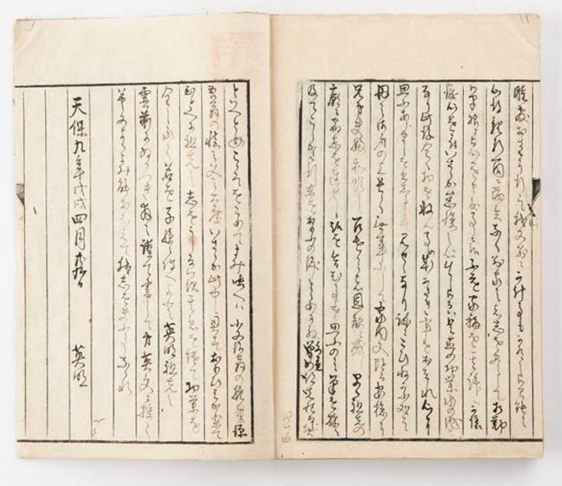
三中は 26 歳で父を亡くし、母と弟２人、妹２人が残されました。すぐ下の弟美年（金次郎）とは 13 歳、その下の弟御蔭（忠三郎）とは 14 歳離れています。天保９（1838）年、38 歳の三中が、25 歳の美年に薬種商を譲るに際し、商人の心得をまとめたのが教訓書「古叙廼布留道」です。およそ２万４千字の中から、主なものを紹介します（筆者訳）。

色川三中肖像
（茨城県指定文化財　当館所蔵）

〇主人の心の持ちようで、奉公人は命令をよく聞く
〇商売は無口ではいけない、言葉の使い方が大切だ
〇経営が苦しかった頃、「いつか好転する」と励まし合っていた
〇もうかるようになっても、商売を怠ってはいけない
〇人は、自分を知ってくれる人のために、尽くすものだ
〇小さな種が大きな草木に育つように、過ちは小さいうちに改めるべきだ
〇身体の暇はよいが、心くばりの暇は少ない方がよい
〇心は細やかに、肝は太く持つべきである

「こぞ（去年）のふるみち（古い道）」の名の通り、三中はこれまでの経験を振り返り、先祖を重んじ、家を守る術を美年に伝えようとしました。

（木塚久仁子）



古叙廼布留道（茨城県指定文化財　当館所蔵）

春季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料・展示もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示してあります。
●色川三中肖像（茨城県指定文化財　当館所蔵）
●家事記 23（茨城県指定文化財　当館所蔵）

２０２１年度　春季の展示資料解説④　近代

考古学に親しむ

―常名出身・島田増次郎―

土浦市内では600を超える遺跡が確認されています。国指定史跡上高津貝塚は、明治39（1906）年、江見水蔭（1869～1934）の小説『探検実記　地中の秘密』で世間に知られるようになりました。また、第42回特別展「東城寺と『山ノ荘』」で紹介した東城寺経塚は、明治37年に『考古界』誌上で和田千吉（1871～1945）が報告し、経塚の研究史上初の学術調査が行われた遺跡として紹介されました。

こうした遺跡が世間に認知された背景には、考古学を愛好する人々の存在があり、そのひとりに都和村常名（土浦市常名）の島田増次郎（1876～1944）がいました。

島田は明治９年生まれ、同24年に島田源兵衛家の養子となりますが、大正13（1924）年頃には東京へ移住、昭和19（1944）年に東京で亡くなっています。詳しい生い立ちは不明ですが、考古学関係の学会誌上にその足跡が残されています。

まずは上高津貝塚との関わりです。『東京人類学会雑誌』第16巻176号（明治33年）において、学会中枢で活躍した沼田頼輔（1867～1934）が、上高津貝塚採集品を「友人島田増次郎」から得たと紹介し、島田も『考古界』第１篇第10号（明治36年）に、上高津貝塚から採集した遺物をもとに、考察を投稿するなどしています。

また、東城寺経塚については、『考古界』第１篇第２号（明治34年）のなかで、経筒から発見された古経が島田から執筆者（沼田と想定される）にもたらされたと記されます。『考古界』第４篇第５・６号（明治37年）では、和田千吉が島田に経巻について問合せたのち、発掘調査を決意し、島田宅に泊まり、ともに現地に赴いたことなどが記されています。島田の存在が、経塚の学術調査につながったことが窺えます。

島田は明治30年代に論考や報告を複数回投稿し、土浦市域を中心とした遺跡や遺物を扱いました。なかには、「近頃色川三中氏の遺稿を閲するに際し、黒坂命墳墓考なる稿本中に…」（『考古界』第１篇第７号）と記しており、土浦町の商人で国学者でもあった色川三中の草稿を見る機会もあったようです。島田の学びの道程は明らかではありませんが、常名が土浦町に隣接したことや、彼が名主を務めた島田家に入ったことなど、新しい知見を得やすい環境が、彼を考古学へ導く土台となったと思われます。

（野田礼子）

晩年の島田増次郎（前列左）と家族（個人所蔵）

※関口満「『東城寺経塚』調査への道程」（第42回特別展図録『東城寺と「山ノ荘」』2021年）を主な参考としました。

春季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

●東城寺経塚出土資料（複製品・古代コーナーに展示）

●色川三中草稿「黒坂命墳墓考」

（茨城県指定文化財　当館所蔵・近代コーナーに展示）

市史編さんだより

郡割改正の理由―酒井卓郎家文書より―

昨年春に刊行した『土浦の古文書　第三十集』に掲載した史料は、飯田地区の酒井為太郎家と酒井卓郎家文書です。両家に残る史料から、明治 29（1896）年に飯田地区が属する中家村（なかやむら）が信太郡（しだぐん）から新治郡に郡割を変更した経緯をみていきたいと思います。

酒井卓郎家には郡割改正願の下書きと思われる史料が残っています（史料番号 283）。史料の包紙には「郡籍組換請願書写控ヘ置タルモ紛失ニ付将来ノ記念トシテ保存スル者也　此ノ件ニ付費額モ自弁シ苦心シタル事」とあります。請願書の控えは紛失したけれども、費用も多く掛かって苦労したので下書きを記念に残しておく、ということです。当時の当主元助が残したものと思われます。

具体的な内容をみてみましょう。この史料は、明治 23 年に衆議院議長への請願書として作成されました。新治郡に郡割りを替えたい理由が書き上げられています。

①中家村は東側に新治郡土浦町がある（土浦町の中央の桜橋以南は信太郡、また中家村は寛政年中は新治郡に属していたことがある）。北は新治郡藤沢村、西は新治郡栄村である。中家村周辺のわずかに東南に細長い地区が信太郡管轄なのである。

②新治郡の役所がある土浦町と接している。

③中家村の東西北は新治郡に接しており、信太郡の西端で境界が錯綜している場所で衝突が絶えない。新治郡粕毛（かすげ）は中家村の大字に、大字佐野子は桜川を挟んで新治郡藤沢村大字虫掛（むしかけ）に飛び地がある。

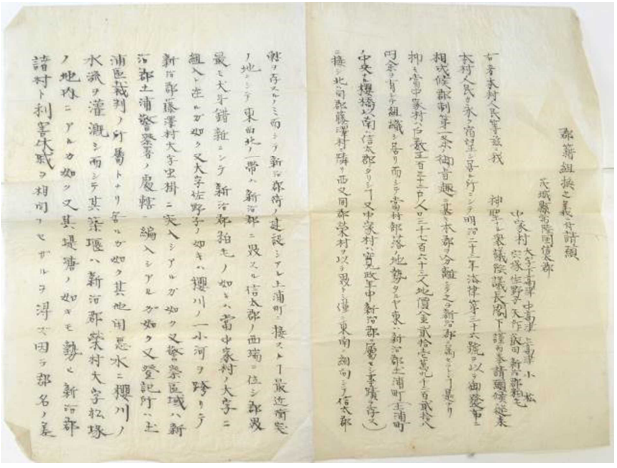
④警察区域は新治郡土浦警察署の所轄に入っている。

⑤登記庁は土浦区裁判（所）の所属である。

⑥用水などは桜川の水を利用している。そのための築堰は新治郡栄村大字松塚の地内にある。

以上のことから、中家村は新治郡諸村と利害が一致する村なのだ、と主張するわけです。

酒井為太郎の残した自身の履歴書（茨城県立歴史館所蔵）にも郡割改正願の経緯が書かれています。それによると、最大の理由は信太郡役所が遠く宿泊して業務を行うため経費がかかること、とあります。



酒井卓郎家文書（一部）　史料番号 283（当館所蔵）

請願の動きは明治 17 年からあり、明治 21 年に為太郎とその親戚の藤井米吉（稲見不二意（ふじい））が発起したようです。明治 23 年８月安田県知事に上申書を提出、村長岡野忠右衛門も意見書を提出します。同 10 月には県知事より諮問案が下付され、村会の満場一致で新治郡に合併したいと決議して答申書を提出します。為太郎の史料では、明治 24 年 11 月に貴族院・衆議院両院にむけて請願書を提出することを決定し、岡野忠右衛門・酒井為太郎・酒井元助ら 23 名が連署したとあります。その後も為太郎一人で大臣などへの請願を続け、郡村組替の希望は通りました。隣村の信太郡東村も同様の交渉をしており、明治 29 年４月に信太郡・河内郡の両郡は稲敷郡と改称され、同時に中家村・東村（あずまむら）は共に新治郡に編入されました。この郡村組替では衆議院議員の色川三郎兵衛等多くの人からも力添えをもらった、と為太郎が書き残しています。長期にわたる請願活動は本当に費用がかかったことでしょう。『土浦市史』では一行で書かれている事項ではありますが、この史料の発見により、より具体的な当時の様子を知ることができました。

（市史編さん係　江島万利子）

土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には「土浦土屋家系譜」（『茨城県史料　近世政治編Ⅲ』所収）を用いました。ゴシック体部分が引用です。

その八、土屋　寛直【つちや　ひろなお】

保三郎　左門

若き父の死　**享和三癸亥年十月四日、亡父但馬守遺領無相違常陸国土浦城九万五千石被下、鳳之間席被　仰付之**

寛直は寛政７（1795）年９月９日に生まれました。父は土浦藩土屋家７代当主の英直（ひでなお）、母は仙台藩伊達家23代当主重村の娘です。跡継ぎが生まれ安泰かと思われましたが、英直は享和３（1803）年８月12日に35歳で亡くなってしまいます。これにより寛直は、数えにしてわずか９歳で土屋家の行く末を担うこととなりました。

叶わない御目見え　**文化七庚午年十月十五日初而　御目見被　仰付登　城可仕処、差掛就病気難罷出旨御届申上之**

文化７（1810）年10月15日、15歳になった寛直は将軍への御目見えが許されました。しかし病弱であったため、本来であれば江戸城へ登城し御目見えをしなければならないところ、病気のため難しいと幕府に届け出ました。その後26日には、療養したものの今しばらく養生したいため御目見えを延期したいと、再度幕府に申し出ています。また12月13日にも難治の病により全快しないため、御目見えできないことを幕府に伝えています。

お家断絶の危機　**同（文化８）年十月二日死去**

『土浦市史』によれば、寛直は文化７年10月15日に16歳で亡くなったと記されています。しかし「土浦土屋家系譜」では翌年10月２日に亡くなったことになっています。このような齟齬（そご）はなぜ起こるのでしょうか。この背景には、武家の当主が養子を迎える場合、生前に幕府へ届け出なくてはならないという原則がありました。江戸時代の初めに整えられたこの制度は、後に緩和されますが、寛直の死はこの原則に則して辻褄（つじつま）を合わせたと考えられます。

土屋家の場合、寛直は元服してまもなく亡くなりました。弟の雄之助も早世していた土屋家は跡取りがおらず、お家断絶の危機に陥りました。そこで、土屋家家臣のほか、親類にあたる松平和泉守（乗寛（のりひろ））、稲葉丹後守（正備（まさなり））、阿部備中守（正精（まさきよ））、松平紀伊守（信志（のぶゆき））、同じ土屋の姓を持つ土屋紀伊守（廉直（ただなお））、土屋丹後守（業直（おきなお））、土屋河内守（光直（てるなお））、土屋平八郎（知直（ともなお））らが幕府に嘆願を行っています。その内容は、寛直の病が治らないため領地を返上したい。ただし、もし養子を認めてくださるのならば、相応の養子を迎え入れたい、というものです。幕府は、土屋家の先祖の勤労もあるため特例として養子を認める旨を申し渡しました。これにより、水戸宰相（水戸徳川家６代徳川治保（はるもり））の子洽三郎（こうざぶろう）（後の彦直（よしなお））を養子に迎えることで、土屋家は存続しました。

（西口正隆）

霞短信

Kasumi-tansin

このコーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。
今号は、イオンモール土浦の色川晃代（いろかわてるよ）さんに寄稿していただきました。

「土浦」の魅力を紹介する

イオンモール土浦では、「土浦の成り立ち・歴史」にスポットを当て、地域と連携を深めていきたいと考え、博物館の協力をいただきながら、これまでに何度か写真展等を開催しました。平成27年「絵葉書にみる土浦」写真展は、明治から昭和初期と土浦市誕生に至る町の様子を絵葉書を通して紹介しました。平成30年には、博物館が開館30周年を迎えるにあたり企画した「花火と土浦」の共同企画として「土浦の花火ポスター・パンフレット展」を開催しました。

令和２年に市制施行80周年を迎えるにあたり、共同企画として「写真でたどる　土浦城と川口川」展を開催、博物館が第41回特別展で開催した内容をイオンモールを会場に紹介し、皆様に知って頂く機会を作りました。この展示では、時代を越えて継承されてきた土浦城の面影を「土浦城址の今―亀城公園」・「街中にたたずむ土浦城の名残」・「川口川　暗渠（あんきょ）でたどる」の３つのテーマをもとに写真と地図で紹介しました。３ヶ所に分かれた会場をまわるスタンプラリーを実施し、子供はもちろん、記念品の「常陸国新治郡庁郭土浦町総図」の絵葉書を求める大人たちにも好評で、記念品の配布は早々と終了してしまいました。この企画の終盤に亀城公園や川口川の暗渠をたどる２時間のウォークツアーも実施しました。晴天にも恵まれ参加した66名の皆様は、時代の名残を直に確認することができ、同行いただいた観光ボランティアさんにたくさんの質問をされていました。ご協力を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

これからもショッピングセンターという利点を生かしながら様々なイベントを通して「土浦」の魅力を紹介し、「地域」を盛り上げていきたいと考えております。

（イオンモール土浦　色川晃代）

コラム（53）　「おうちもミュージアム」と「展示解説会」

博物館では、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策として、展示室での解説を原則中止としています。昨年６月にスタートした「おうちもミュージアム」は、展示室だよりで紹介する見どころを「展示解説会」の代わりに動画でお伝えするものです。QRコードをスマートフォンなどで読み取るか、ホームページにアクセスすると、解説を視聴できる仕組みで、お陰様で取り組みに対しては高評価をいただいています。

動画の最大の利点は、いつでもどこでも何度でも見られることでしょう。もちろんネット接続環境が整っていることが条件で、それらが整わない来館者への対応は課題です。また、あらためて感じるのは、「展示解説会」が来館者との生の対話の場であったということです。その道の専門家から、初めて来館した小学生まで、さまざまなやりとりは、展示にあらたな意味を生むものでもありました。新しい仕組みと今までのやり方が共存できる安心安全な日常を待ちたいと思います。

（野田礼子）

情報ライブラリー更新状況

【2021・５・１現在の登録数】

古写真　600点（＋0）
絵葉書　512点（＋0）

※（　）内は2021年１月５日時点との比較です。
展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。１ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。
※新型コロナウイルス感染予防のため、一部ご利用を制限しております。ご了承ください。

霞（かすみ）　２０２１年度
春季展示室だより（通巻第53号）
編集・発行　土浦市立博物館
茨城県土浦市中央１－１５－１８
ＴＥＬ　０２９－８２４－２９２８
ＦＡＸ　０２９－８２４－９４２３
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html
１～５ページのタイトルバック（背景）は、博物館２階庭園展示です。

2021年度春季展示は、**2021年５月11日（火）～６月27日（日）**となります。「霞」2021年度夏季展示室だより（通巻第54号）は**2021年６月29日（火）発行予定**です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。（カラー版）